INTERVIEW

公益社団法人地域医療振興協会
吉新通康 理事長

2024年を迎えて

聞き手：山田隆司　地域医療研究所長

自治医大卒業生の歩みを振り返る

山田隆司（聞き手） 今日は「2024年を迎えて」ということで，地域医療振興協会の理事長である吉新通康先生に今後の展望を伺えればと思います．

吉新通康　地域医療振興協会は自治医科大学の同窓会から袂を分かって37年目になります．自治医大は1972年に47都道府県と自治省が協同して創設した大学ですが，おおむねその目的は達成できたのではないかと思っています．卒業生の95%は卒後９年間，出身県の地域医療を担うという義務を果たし，義務後も35%が出身県やへき地に残っています．全国のいろいろなところで地域医療のことが話題になると，そこには必ずと言っていいほど卒業生がいる．そういう意味では自治医大の功績は大きいと思っています．

ただ，当時他大学は，ほとんどの卒業生が母校に残って，大学の医局講座制の中で専門医を目指していたわけですが，自治医大は，県立病院で研修をして県の人事で，その県の医療事情に応えていくというのが通常の姿だったわけです．当初，地域に赴任する卒業生の研修システムが整っていなかった中，卒業生は大学から出身県に放り出された気がしました．でも長い目で見ると，初代中尾喜久学長や髙久史麿前学長が意図したような形になってきているように思います．とはいえ，残念ながら大学の医局の強

い都道府県では，まだ医局人事と卒業生の動き方に齟齬があるようですが，徐々に解決していくことを期待しています．

大事なのは，中尾学長もよく言っておられたのですが，自治医大の卒業生が自分たちの医療の拠点を手に入れることと，もう一つは，しっかりとした教育を受けられるような仕組みづくりです．それは卒業生本人にとってはもちろんですが，一方で卒業生がいろいろな医療人に教育を提供できるかどうかというのがキーになるのではないかと，最近考えています．

協会としても，地域医療の定義や法人としてのミッションはずっと変わっていませんが，事業内容は少しずつ変わってきています．今後もへき地を支えるべく医療拠点を確保すること，そこから医師を派遣して地域の医療需要に細やかに対応できるようにすること，医師をはじめとした職員の教育に力を入れること，という３つの大きな柱をもっともっと強化していかなくてはいけないと思っています．

将来的に地域医療は生活支援型になっていきます．医療側から一方的にケアを提供するのではなく，地域の人と共に仕組みをつくり，生活の場として理想郷をつくっていくというのが国の地域包括ケアシステムの方針だと思うので，われわれもそれに向けて，地域こそ，へき地こそ，都市部に負けないケアシステムがあるということを目指していくのが，協会の今後の方向性だと考えています．

山田　先生の最初のお話にありましたが，他大学が従来の医局講座制の中で専門医を目指す中，自治医大卒業生は当初からローテート研修を受けて地域に赴き，そこでそれぞれが地域ニーズに応えながら踏ん張って生き残ってきたように思います．一方で，協会という枠組みができたことによって，拠点を確保したり，人材育成をしたりということができるようになったわけで，卒業生にとってはこれまでの経験を発展させるチャンスが広がってきたのだと思うのです．

吉新　そうです．だから37年前に地域医療振興協会ができなかったら卒業生の行く末が定まらなかったわけで，みんな他大学の医局に取り込まれることになって終わったのではないかと思います．そうなると自治医大の実績,「今」の姿はなかったと思います．そうならないために，われわれ卒業生が自分たちで動いたわけですね．

山田　本当ですね．各県に分散して従来の医局の仕組みの中だけで生きるということになると，義務年限という９年間はまさしくハンディになり，各都道府県で都合よく使われるだけで終わってしまいかねない．へき地医療で培った力をその後も十分発揮することなく，自治医大の使命は中途半端になってしまったのではないかと思います．

吉新　言ってみれば，自治医大と同じように目的別大学として設立された防衛医大や産業医大がそうですよね．でも自治医大は，地域の隅っこや離島へ行けばそこに志を同じくした卒業生が多く残って頑張っている．これは大したものだと思っています．

山田　協会がここまで大きく成長できたのは，卒業生の地域での経験であり，言ってみれば個々の卒業生の力ですよね．それを思うと卒業生がもっと求心力を持って集まれば，さらなる地域医療の大改革になるのではないかと思うのですが．

吉新　このくらいがちょうどいいのかもしれないですよ．アクセルを踏めば音はするけれど，前には進んでいない．でも進んでいないように見えて実は少しずつ前に進んでいるんです．